

# わがまち歴史散歩

## 江戸時代の神社信仰とその財政基盤

### ○心のよりどころ

「伊居太神社日記」には、正月三日にたくさんの人が神社にお参りするといった「初詣」の様子を語る記事は一度も出てきません。つまり、江戸時代にはこのような習慣はなかったのです。

実は、神社への宗教的尊崇の念の表し方は今とはずいぶん違っていたようです。例えば、「伊居太神社日記」文化6年(1809)10月16日には池田で酒造を営んでいた大和屋仁右衛門の記述があります。彼は、前年大坂伝法の地に事業の場所を移し、江戸行きの船を運航させていますが、その名を伊居太神社の別名にちなむ「穴織丸」と名付け、出船時も、また無事に着船したときも船頭らに神社へ参拝させています。

このように、江戸時代の神社は、生地を離れた個人にとっても産土社うぶつちやとして心のよりどころとなっていたのです。また地域の人々全体にとっても安寧と繁栄を願い、また、心を合わせる場所として存在していたのです。

### ○神社の存続を支えるもの

さて、こうした神社の存続には大勢の人々の信仰心は言うまでも



伊居太神社

ないとして、経営を安定させる財政的な支えも重要な条件であったと考えるべきでしょう。今回はここに注目して検討してみます。

一つ目は、大きな工事に有力者が投資するという点です。文化7年5月25日、上池田の料理屋めん茂もん「こと木綿屋茂兵衛が伊居太神社にやつてきて言います。伊居太神社および呉服神社ともに馬場先へ石の玉垣造立の世話をしたいと。両神社ともこれを受け入れました。木綿屋茂兵衛は、工事中「願主木綿屋茂兵衛」と記した木札を現場に立てました。これで、有力な商人が両神社を尊崇し、大工事の財政を支えるという形が示されたわけですね。もちろん、「綿茂」こと木綿屋茂兵衛の名前は大きく上がります。

二つ目。神社には、氏子から集める協力金のようなものがあつたようです。例えば、6月頃には麦の収穫を待って「麦初穂」を集めています。文化7年(1810)には麦8斗5升で、銭5貫57文となつたと書かれています。安土桃山時代に豊臣家の庇護から始まつた神社の権利だつたのかも知れません。

三つ目には、特定の商人などからの供物です。文化6年には10月から12月末までに米屋町鍋屋治兵衛から神酒1升、勝尾寺屋平兵衛から同じく1升、小坂田与三右衛門から米1斗7升、同じく正智寺より同量といった感じでした。これらは、時期を見て「神供」として御殿前に飾られます。

四つ目には、「さいせん」あるいは「さんせん」と呼ばれるものです。いずれも個々に拝礼する人がそのたびに投げ入れる小銭です。毎月の初めに勘定し、銭で1貫860文とか1貫900文とかいった数字が記されています。神社が大勢の参拝者によって支えられていたことがわかります。なお、この「さんせん」には臨時のものもありました。例えば、文化7年2月18日難市なんぢのときには集まる人が多く、合計1貫文に上つたとありま

す。もちろん、祭礼のときにもぎわつたものでしょう。

しかしなんと言つても、神社の財政を考えるとときには、宮司の出身家あるいは後見人の財産的信用を見落としてはなりません。伊居太神社も宮司の出身家である大戸屋おほと「大和屋」の信用があつて、経営はさらに安定したと考えるべきでしょう。何かあつても大和屋が付いているというのは、大きな安心感を与えたと思われま

### ○氏子の安心と尊崇の気持ち

神社の経営が安定してはじめて、氏子らは、その神社は悠久の昔から存在し、将来もそのまま続くという神社の説明を信じ、安心感を持つことができます。氏子たちは、理屈抜きにそうした神社を心の支えとして尊崇していったのではないのでしょうか。

(市史編纂委員会委員長・小田康徳)  
◆問い合わせは生涯学習推進課市史編纂 ☎754・6674